SHOW-HEY シネマルーム

★★★★

ゲッベルス
ヒトラーをプロデュースした男

2024 年／ドイツ・スロバキア映画
配給：アットエンタテインメント／128 分

2025（令和 7）年 4 月 22 日鑑賞	テアトル梅田

Data　２０２５－４３

監督・脚本：ヨアヒム・Ａ・ラング
出演：ロベルト・シュタットローバー／フリッツ・カール／フランツィスカ・ワイズ

みどころ

ヒトラー政権下のナンバー2 は、ゲーリング？ヒムラー？それともゲッベルス？アイヒマンは下級役人に過ぎなかったが、宣伝大臣として権勢を振るったゲッベルスの役割の大きさは？

私たち日本人が日露戦争や太平洋戦争を伝えるニュース映像をたくさん観てきたのと同じように、ドイツ人はナチスドイツのそれを観てきたが、それはすべてゲッベルスの演出によるもの？ニュース映像をチェックしながら、「真実は私が決める！」と豪語するゲッベルスの姿はすごい。もっとも、今も世界はゲッベルス＝扇動者でいっぱいだから、某国の某大統領の姿はゲッベルスにそっくり！？

戦後 80 年の今も、「ヒトラーもの」が健在なことは喜ばしいが、ヨアヒム・A・ラング監督が本作で描くフィクションとニュース映像との混在にはいささか戸惑いが。他方、イタリアでは極右のメラーニ政権の誕生したが、ドイツでは 5 月 6 日、中道右派の CDU・CSU（キリスト教民主・社会同盟）を率いるメルツ氏が新首相に選出され、中道左派の SPD（社会民主党）との連立政権を発足させたことに注目！これによるヨーロッパの軍備の拡張は？徴兵制の復活は？

本作から考えるべきことは多いが、さて・・・。

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

■□■戦後 80 年の 2025 年も「ヒトラーもの」は健在！■□■

近時、「ホロコーストもの」、「アウシュビッツもの」、「ヒトラーもの」が減っているが、それでも『関心領域』(23 年)（『シネマ 56』38 頁）や『ステラ　ヒトラーにユダヤ人同胞を売った女』(23 年)（『シネマ 57』116 頁）があった。しかし、残念ながら、両作とも本

格的な「ホロコーストもの」「ヒトラーもの」とは言えなかった。

そんな時代状況下、10 代の頃から、「なぜドイツ人の大多数はヒトラーに従って戦争とホロコーストに突入したのか。」という問題に悩んできたという、1959 年生まれのドイツ人監督ヨアヒム・A・ラングは、「1938 年から 1945 年までの決定的な数年間におけるナチ政権の指導者集団に焦点を当て」て上記のテーマに肉薄するべく、本作の脚本を書き監督を！その主人公は、宣伝大臣、ヨーゼフ・ゲッベルスだ。

■□■ナンバー2 はゲーリング？ヒムラー？それともゲッベルス？■□■

本作の原題『FÜHRER UND VERFÜHRER』を直訳すると「総統（フューラー）と誘惑者（ファアフューラー）」だから、これがヒトラーとゲッベルスを指していることは明らかだ。他方、ヒトラーの側近として最も有名なのは、① 国家元帥のヘイマン・ゲーリング、② 宣伝大臣のヨーゼフ・ゲッベルス、③ 全ドイツ警察長官のハインリッヒ・ヒムラーだが、その他にも「ナチの野獣」、「ナチス第三の男」と呼ばれたラインハルト・ハイドリヒもいるし、ヒトラー政権下での序列はずっと下位ながら、『ハンナ・アーレント』（12 年）（『シネマ 32』215 頁）で有名になったアドルフ・アイヒマンもいる。

ハインハルト・ハイドリヒを主人公にした「ヒトラーもの」は、『ハイドリヒを撃て！「ナチの野獣」暗殺作戦』（16 年）（『シネマ 40』190 頁）や『ナチス第三の男』（17 年）（『シネマ 43』210 頁）等がある。また、アドルフ・アイヒマンを主人公にした「ヒトラーもの」は、『アイヒマンを追え！ナチスがもっとも畏れた男』（15 年）（『シネマ 39』94 頁）、『アイヒマン・ショー　歴史を映した男たち』（15 年）（『シネマ 38』150 頁）、『アイヒマンの後継者　ミルグラム博士の恐るべき告発』（15 年）（『シネマ 39』101 頁）等がある。それに対してゲッベルスを主人公にした「ヒトラーもの」は、『ゲッベルスと私』（16 年）（『ヒトラーもの、ホロコーストもの、ナチス映画大全集』61 頁）くらいのもの！？

しかし『ヒトラー　～最期の 12 日間～』（04 年）（『シネマ 8』292 頁）を観れば、最終局面でゲーリングはヒトラーを裏切ったし、ハインリッヒもヒトラーを裏切った。しかし、ゲッベルスは妻子を道連れにヒトラーと共に自殺したから、最もヒトラーに忠誠を尽くした男は間違いなくゲッベルス！？そう考えると、本作の「総統（フューラー）と誘惑者（ファアフュラー）」という原題の意味がしっかり理解できる。それに対して邦題は『ゲッベルス　ヒトラーをプロデュースした男』だが、その意味は？

■□■今も世界はゲッベルス＝“扇動者”でいっぱい！■□■

本作のパンフレットの PRODUCTION NOTE は、「映画のテーマ」として次の文章を掲げている。すなわち、

／ 映画のテーマ ／

『ゲッベルス　ヒトラーをプロデュースした男』は、人類最大の犯罪であるホロコーストと第二次世界大戦、そして歴史上最も重要な問いのひとつをテーマにしている。なぜドイツ人の大多数はヒトラーに従って戦争とホロコーストに突入したのか、そしてなぜ加害者たちは、何百万人もの罪のない犠牲者を相手に、想像を絶する犯罪を犯すことができたのか。私たちの映画はタブーを破るものであり、これまでにない方法でこのテーマを扱った作品である。加害者の視点を見せる。これは必要不可欠なことである。なぜなら、人類史上最大の犯罪者を間近から見ること、彼らに近づくことによってのみ、彼らの顔から仮面をはぎ取り、デマゴギーのメカニズムを透明にし、現在の扇動者の武装を解除することができるからである。

他方、本作のチラシは、「終戦から 80 年。いまも世界はゲッベルス＝《扇動者》が溢れ、我々は操られている。」の見出しを掲げて、次のように紹介している。

1933年のヒトラー首相就任から1945年にヒトラーが亡くなるまでの間、プロパガンダを主導する宣伝大臣として、国民を扇動してきたヨーゼフ・ゲッベルス。当初は平和を強調していたが、ユダヤ人の一掃と侵略戦争へと突き進むヒトラーから激しく批判され、ゲッベルスは信頼を失う。愛人との関係も断ち切られ、自身の地位を回復させるため、ヒトラーが望む反ユダヤ映画の製作、大衆を扇動する演説、綿密に計画された戦勝パレードを次々と企画し、国民の熱狂とヒトラーからの信頼を再び勝ち取るゲッベルス。独ソ戦でヒトラーの戦争は本格化し、ユダヤ人大量虐殺はピークに達する。スターリングラード敗戦後、ゲッベルスは国民の戦争参加をあおる"総力戦演説"を行う。しかし、状況がますます絶望的になっていく中、ゲッベルスはヒトラーとともに第三帝国のイメージを後世に残す最も過激なプロパガンダを仕掛ける。

ヒトラーの腹心として、プロパガンダ政策を担ったゲッベルスは、演説、ラジオ、映画などメディアを通して国民感情を煽り、操り、ヒトラー政権を拡大させた。本作は、入念なリサーチに基づきゲッベルスの驚きの発言や行動、ヒトラーやナチ幹部たちの恐るべき会話など、裏側の実態を描き出し、その半生と戦略を暴き出す。
本作が2024年ミュンヘン映画祭で観客賞を受賞し評価されたのは、ゲッベルスの手法が現在も広がり続けているからに他ならない。ウクライナやガザにおける戦争、ポピュリズムや極右台頭の背後で喧伝される言葉や映像、量産されるフェイクニュース。インターネット全盛の現代社会で我々がどのようにウソを見抜き、真実を見極めることができるのか。これは現代社会への警告である。

今も世界にあふれているゲッベルス（扇動者）が、誰を指すのかは難しいところだが、少なくとも、「MEGA（Make America Great Again）」を掲げる米国のトランプ大統領や、「自国第一」を掲げてヨーロッパで勢いづいている極右勢力を指すことは衆目の一致するところだ。そんな問題意識を前面に押し出した本作は必見！

■□■ドイツの政権は？メルツ氏率いる新連立政権の行方は？■□■

本作を鑑賞した 2025 年 4／22 現在のドイツの首相は、SPD（ドイツ社会民主党）のショルツ首相だが、2024 年 11 月のアメリカ大統領選挙でトランプ（共和党）がバイデン（民主党）に勝利したことによって、現在の世界の政治情勢は大きく変化している。他方、トランプ大統領の最大のテーマは「MEGA（Make America Great Again）」だが、彼が掲げる「アメリカン・ファースト」の思想はヨーロッパにも伝播し、各国で「自国ファースト」と「移民反対」を掲げる極右政党が躍進してきた。そのトップは極右メラーニ政権を誕生させたイタリアだが、ドイツでも 2025 年 2 月の連邦議会（下院）選挙（630 議席）、“反移民”を鮮明にする AfD（ドイツのための選択肢）が 152 議席を獲得し第 2 党に躍進した。

そんなドイツでは CDU（キリスト教民主同盟）、CSU（キリスト教社会同盟）、SPD（社会民主党）の保守党による第 3 次、第 4 次メルケル政権が 2013～21 年まで続いていたが、2025 年 4／6 には、新たにメルツ氏率いる中道右派の CDU・CSU（キリスト教民主・社会同盟）とショルツ氏率いる中道左派の SPD（社会民主党）が連立政権を樹立することとなり、メルツ氏が首相に選出された。もっとも、今回の首相選出にはドイツ連邦議会の定数 630 のうち過半数の 316 が必要なところ、第 1 回投票ではメルツ氏の票が 310 票にとどまったため、2 回目の投票を行い、325 票の賛成を獲得したそうだ。このように 1 部造反者が出て 1 回目の投票で選出されなかったことによって、メルツ氏の求心力の低下が心配されているが、さあ、新たな連立政権の行方は？

他方、2022 年 2 月のロシアによるウクライナ侵攻を契機としてヨーロッパ各国では軍備拡張の必要性や徴兵制の復活が叫ばれているが、それはドイツも同じだ。兵力増強に動くヨーロッパ各国の中で、今後のドイツの新連立政権の舵取りは如何に？1930 年代にナチス・ヒトラーが、議会の内外で勢力を伸ばしたのも、今と似たような状況だったのでは・・・？

■□■真実は私が決める！現実と映像の区別は？■□■

何がホントの真実で、何が作られた真実（＝演出）なのかの識別は難しい。私たち（戦後生れの）日本人は民主主義教育の中で育ったため、北朝鮮の専制政治のあり方や国民が金正恩を崇拝している姿を単純に批判しているが、昭和初期から太平洋戦争が終了するまでの日本人だって、何の疑問もなく天皇陛下を「現人神」と崇拝し、「天皇陛下万歳！」と叫んでいたはずだ。

また、情報伝達手段に乏しかったあの時代では、各新聞社が派遣した取材員が撮ったニュース映像が貴重な真実を伝える映像だったが、その実は・・・？他方、AI を含む情報伝達手段が豊富になった昨今は、SNS 上でフェイクニュースを含む多くの情報があふれかえっているから、その中から真実の情報を取り出す作業は困難を極めている。そんな時代状況下、今や世界がゲッベルス＝扇動者で溢れかえっているのは、ある意味で当然だ。

本作冒頭は、1945 年 3 月 20 日、ヒトラーが全国青少年指導者アクスマンとヒトラー青少年（ユーゲント）と面会した映像をチェックするゲッベルスの姿が登場する。ヒトラーの手の震えを発見したゲッベルスは、「この映像は公開するな」と命じたが、それは何のた

め？そして、「唯一の素材ですし、総統の変わりようは事実です」と反論する部下に対し、ゲッベルスは、「真実は私が決める」と言い放ったからすごい。ゲッベルスの考えによれば、ニュース映像は真実を伝えるものではなく、あくまで演出！そして、真実はナチス政権下でプロパガンダを主導する宣伝大臣として国民を扇動してきたゲッベルスが決めるものなのだ。なるほど、なるほど。ちなみに、「真実は私が決める」というセリフが今最もよく似合うのは、アメリカのトランプ大統領だが、さてその是非は？

■□■ドキュメンタリーとフィクションの混在に違和感が！■□■

本作のパンフレットにある監督インタビューで、ヨアヒム・A・ラング監督は、「第三帝国の資料に焦点を当てた映画はすべて、我々が持っている歴史的映像のほとんどが、ゲッベルスやナチスの宣伝家たちによって演出されたものだという問題に直面しなければなりません。つまり、素材には常にナチスの意図が含まれているため、自分自身を素材の奴隷にしてしまう危険性が大いにあるのです。」と語っている。そして、その一例として「スポーツ宮殿の演説」を挙げている。それは、ドイツの敗戦色が濃くなり、ヒトラーからも見放されかけているゲッベルスが、1943 年 2 月 3 日に形勢逆転をかけて国民に向けて行った渾身の総力戦演説のシークエンスだ。私は今回初めて知ったが、これは歴史に残る演説で、ゲッベルスは再び国民の熱狂とヒトラーの信頼を得たらしい。

他方、明治天皇の役を演じることができたのは、大河内傳次郎や三船敏郎など数少ない俳優だけだし、イエス・キリスト役を演じた俳優も数少ない。それに対して、「ヒトラーもの」でヒトラー役を演じた俳優はかなりの数にのぼる。その中で最も有名な俳優は、『チャップリンの独裁者』（40 年）で、チャップリンとユダヤ人の床屋の 2 役を一人で演じたチャールズ・チャップリン、もう 1 人は『ヒトラー最後の 12 日間』でヒトラー役を演じたブルーノ・ガンツだ。

それに対して、本作でヒトラー役とゲッベルス役を演じた俳優は私の全然知らない俳優だから、スクリーン上でこれが本当のヒトラーだ、これが本当のゲッベルスだと思うには、それなりの時間が必要だった。それに対して、本作に登場する数々のニュース映像に見るヒトラーとゲッベルスの顔はおなじみのもの。したがって、その両者が混在しながらスクリーン上に登場してくると、私にはいささか違和感が！もちろん、本作のロベルト・シュタットローバーが演じているゲッベルスがフィクションであることは明らかだが、そうかといって、ニュース映像上のゲッベルスやヒトラーも、ゲッベルスやナチスの宣伝家たちによって演出されたものだという目で見ることにはいささか困難も・・・。

2025（令和 7）年 5 月 9 日記